

第22回 NHK全国俳句大会より

「特選作者の横顔と 選者からのメッセージ」

生

今年度のNHK全国俳句大会は、
新型コロナウイルスの感染拡大防止
の観点から、NHKホールでの公開
による開催を中止いたしました。

例年とは異なる形式のため、特選
作品の背景や選者からのメッセージ
などを、少しでもみなさまにお届け
したいという想いで作成したのがこ
の冊子です。今後の作句にもお役立
ていただけましたら幸いです。

特選作者の横顔

自由題・題詠の特選一席に選ばれた作者の皆さまです。
受賞の喜び、大会への思いを作品とともにご紹介いたします。



稲畑廣太郎選

夕星に語りかけたる虫の声



生前俳句を楽しんでいた義母が亡くなる直前に、「いつの日か句集を作って…」と言い残したのです。その半年後、俳句の門をたたきました。ようやく二人の合同句集を考えています。

福岡 宮脇睦子

井上康明選

露草や嬰百日の指ぢから



十二度目の投句になると思います。大会への参加は私の拠になっており励まされております。特選内定の通知を初めていただき、娘夫婦も喜んでくれました。

大阪 浅井映子

題詠一席

鉦叩闇に段差の生まれけり



〈あつあつの金時を割る力抜き 川崎展宏〉の句に会ってから十五年。焚火の匂い、焼芋の湯気の香り、振る舞う人の息の白さや動作がありありと見えて衝撃でした。

神奈川 原田博之

題詠一席

拭き上げて雪の匂ひの生家かな



正直、「まさか」と思い、老眼鏡をかけて「特選」の文字を確認しました。母は「着物を作っただげる」と言い、息子と娘はめずらしく尊敬のまなざしで見てくださいました。

東京 冬魚

自由題一席

宇多喜代子選

木々の影深く沈めて冬の水

東京 川副康孝



三年前に病を得、現在要介護三の身で家にこもりがちですが、生きているかぎり作句を続け、自分の人生を自然体の実あるものにしたと思います。

題詠一席

放生会水に抗ふ魚もいて

奈良 佐藤雅之



いきなり特選という大きな榮譽を賜わり、心の底から大きな喜びが沸いてきました。高校生の頃、詩をせつせと書いていた娘はそんな私を見て、泣いて父の快挙を喜んでくれました。

小澤 實選

山風に川風加へ盆の家

群馬 嶋崎賢司



定年退職後、文学好きな仲間と十七文字の世界に出会い、句集や本とお互いの研鑽でここまでやって参りました。今回で二回目の特選となり、誠に嬉しく感謝申し上げます。

題詠一席

死にたいは生きたい秋の夜の電話

神奈川 天野信敏



二〇〇七年度の当大会で大会大賞を受賞した時より、数倍もうれしいです。家族もとても喜んでいきます。数年前に亡くなられた、私の俳画の師にも、墓前で報告したいと思えます。

權未知子選

てのひらの渴きに一つ蛇苺

東京 佐藤 茉



毎年一月、特選の方々を遠い存在と見ておりましたので驚きました。家族の喜ぶ様子に続けていたご褒美を戴いた様な思っております。俳句という楽しみがあることに感謝しております。

題詠一席

拭き上げて雪の匂ひの生家かな

東京 冬 魚



井上康明先生特選一席も受賞されています。

自由題一席

自由題一席

自由題一席

題詠一席

題詠一席

題詠一席

片山由美子選

遠足が来てライオンの立ちあがる

神奈川 竹村清繁



平成二十六年NHK全国俳句大会の西村和子先生の特選（泣き顔も一枚撮りて七五三）以来二度目の内定で、家族も大変喜んでます。今回も孫一家の動物園の句です。

自由題一席

鈴木章和選

夏服の眩しきままに遠ざかる

兵庫 奥村芳弘



長く楽しめる趣味を持ちたい。何かを自分で作ってみたいといった気持ちで始めました。句歴は二十五年程。これからも悩みながら、楽しんでみながら、さらに精進していきたいと思えます。

自由題一席

高柳克弘選

でっかいぞ東京タワーだこのつらら

滋賀 瀬戸山棟



俳句を詠んでいる曾祖母とよく一緒に遊んでいて、曾孫がつぶやくことを、書き留めるようにしています。バルセロナは暖かったが、日本は寒く、ツララにびっくりしていました。

自由題一席

会へばすぐ山の話や生ビール

埼玉 小林通子



恐る恐る投句してから、五度目になります。全国大会であり、本や新聞でしか知ることのできない先生方に選句してもらえ、ことは励みになります。これからも楽しみにしております。

題詠一席

生も死も学び卒業畜産部

長野 福澤るみ子



以前、小林一茶の生まれた信濃町に勤務したことがあり、俳句には親しみを覚えていました。十七音で独自性を発揮することは難しいが、最後は自分の感性を信じたいと思っています。

題詠一席

蟬生るかくも込み合ふとは知らず

東京 田中久幸



父の遺稿集に俳句を見つけたのがきっかけでした。「運河」入会以来十二年、そこで鍛えられているが、今は私の生活の基本。句会という別世界を得て、多くの句友を得た。

題詠一席

対馬康子選

小夜しぐれ夢の血中濃度かな

愛媛 片山一行



一万句を超す中からの一席は、ただありがたいです。昨年、龍太賞で宇多喜代子先生・選者賞に選んでいただきました。自ら目指す俳句とも近い宇多先生の選で、非常に励みになりました。

夏井いつき選

焼べ入れて鱗の爆ぜる鮭打棒

茨城 奥村雄治



平成十一年に父の「年輪大賞」の受賞を、妻とNHKホールで見学し、いつか私もと。コロナ禍でホールには行けませんが、今回の内定には、私も妻も大変喜びました。

西村和子選

秋蝶の躑きつつも風拾ふ

和歌山 山本容子



俳句は亡き母の勧めがあり始めました。このよ
うな機会に恵まれて、俳句を勧めてくれた亡き
母と俳句の話などを共有できたことや、今俳
句を学べている日々感謝しています。

自由題一席

自由題一席

自由題一席

題詠一席

題詠一席

題詠一席

銀漢や未来は生まれぬ砂時計

鹿児島 久永のり尾



東京在住時から二十年近く夢ではないかと思う
賞に浴し、夫婦して喜び合いました。私にとり
俳句は日記であり、「十七文字に詩を」目指して
生涯続けたいと思っています。

ダリア、ダリア先生の名字が変わる

東京 嫉妬林檎



きっかけは、高校で文芸部に入部したことです。
社会人になり、手軽にできる趣味として再び触
れるようになりました。これからもマイペース
で俳句を詠んでいきたいです。

先生も園児の歩幅運動会

群馬 木下涼薫



定年退職を機に、生涯楽しめる趣味として俳句
を始めました。文化協会や公民館活動をしなが
ら、これからも仲間と俳句の裾野を広げる活動
をしていきたいと思っています。

星野高士選

噴煙の真中辺りや春の月

鹿児島 尾辻敬弘



退職後の二〇〇一年。俳句への入門でした。無心になれない作句への苛立ち、もう俳句も卒業だ。無心の一句、山への一句、春の月は臆でした。母なる桜島、俳句への感謝の卒業です。

題詠一席

櫓を漕げば楽の生まるる良夜かな

埼玉 河瀬俊彦



六度くらい投句したと思います。毎年投句だけで、大会には出席したことはありません。コロナ禍が落ち着き、大会が再開されましたら一度出席させていただきたいと思っています。

宮坂静生選

東京の一隅灯す夜学生

愛知 市原亜希子



数年前から家族に「生涯のうちにNHKの全国大会で表彰台に立ちたい」と夢を話していました。俳歴の長かった亡き父へ最初に報告しました。

題詠一席

銀漢や未来は生まれぬ砂時計

鹿児島 久永のり尾



対馬康子先生特選一席も受賞されています。

番組の放送予定

NHK Eテレ 「第22回NHK全国俳句大会」

2021年2月28日(日)

15時15分～16時15分

●選者：高柳克弘・西村和子・權未知子

●司会：NHKアナウンサー 中川緑

●披講：NHKアナウンサー 小澤康喬

※放送内容や放送日時は、特別番組などにより変更・休止する場合がございます。

自由題特選二席

稲畑廣太郎選

宙を飛ぶ鯉の見たる空の色

愛媛 伊藤 英夫

井上 康明選

灼熱の日本列島終戦日

兵庫 高柳しずか

宇多喜代子選

折り鶴の胸ふっくらと春隣

東京 西島 明子

小澤 實選

幼子を高く茅の輪をくぐりけり

福島 三上 昭俊

權 未知子選

ネクタイで守るみぞおち万愚節

神奈川 田中 木江

片山由美子選

雨音に寝て老鶯に目覚めけり

鹿児島 松下 徳幸

鈴木 章和選

丁寧にすっぴんとなる良夜かな

北海道 齋藤 明美

高柳 克弘選

団栗に降られひとりになれぬ森

東京 うづら

対馬 康子選

新緑の中に婚姻色のひれ

宮城 坂下 遊馬

夏井いつき選

硯海のやうな東京湾に月

栃木 龍 太一

西村 和子選

ドリアンの話や父の敗戦日

神奈川 今井 眞弓

星野 高士選

十五日過ぎて八月軽くなる

新潟 中澤 安子

宮坂 静生選

宇宙船めきて月夜の金魚玉

栃木 龍 太一

選者近詠作品とメツセージ

(敬称略 五十音順)

稲畑廣太郎

露の玉弾きて猫の駈けて来し
隼の形崩れし時獲物

井上 康明

数へても数へても山浮寝鳥
川底に触れ寒鯉の動かざる

宇多喜代子

足弱にえのころ草が絡みつく
青葱の先のするどき夜明け前

小澤 實

落椿ほぼ天向くや横倒しも
先端に蜷しかとをり蜷のみち

權 未知子

流水の青を身ごもりさうなひと
流燈会指の先まで長女なる

片山由美子

聞きとめしことまなざしに初音かな
落花踏みゆく白波を踏むごとく

新型コロナウイルス感染症流行拡大のため、対面会会の開催がかなわなくなった。自宅で長く自粛生活を送っている高齢の会員と電車で毎日通勤している若手の会員とを一緒の部屋に決して入れなくなかったからだ。そのために、メールでの句会に移行した。メールができない会員の句稿は幹事にデータ化して、届けてもらっている。対面会会の頃よりも細やかな指導ができていたのではないかと自負している。時間はとられるが、この事態でも指導が続けられることを心底幸せと思う。

小澤 實

未曾有の事態となったこの一年、俳句の実作者の皆さまにおかれましてもかなりつらい年だったのではないでしょうか。

俳句は不要不急の最たるものといえます。たしかに俳句はおなかを満たしてくれたり、収入をもたらしてくれるものではありません。また、目に見えるかたちで生活を改善してくれるものでもありません。しかし、俳句は「心の糧」になり得ます。俳句で培った心のゆたかさが明日の光になると信じ、一句一句刻んで行ってください。

權 未知子

鈴木 章和

さるすべり小鳥の水も替へにけり
いつも身のどこかに吹いて春の風

高柳 克弘

ことごとく未踏なりけり冬の星
抱きとめし子に寒木の硬さあり

対馬 康子

みずうみの底までひらく麦の秋
木の実降る声がことばとなる子ども

夏井いつき

天神や椿の尻に穴がある
春のみみ百ほどその影の百ほど

西村 和子

衣更へて居職の心定まりぬ
袖通さざるままのちの更衣

星野 高士

街音もその中にあり初電話
夕護摩の火の色ひとつ春を待つ

宮坂 静生

銀河系宇宙の冬へ白を彫る
白つくる手斧さばきの初仕事

思いがけなくコロナ禍が世界を一変させました。俳句においても、句会など直接人と会って交流することが断たれ、様々に自分の内面と向き合うことを余儀なくされています。

私が今年度選者を務めている「NHK俳句」の一年間のテーマは「こころを詠む」。俳句はこころの産物です。そこに作者でなければ書けない自由と独自性が生まれます。こころの奥底にためている人生の喜び、悲しみなどの経験を、これからもたくさん俳句にしまりましょう。

対馬 康子

白を彫る。晩秋から真冬の作業である。一度俳句に詠みたいと思っていた。少年の日を過ごした安曇野の母の実家が製材所で、その一隅で家具職人が樺の丸太から白を作っていた。あれから半世紀あまり。樹齢百五十年前後の樺を高さ五十cmほどにチェーンソーで切る。輪切りにした面を粗彫りし、後に手斧ちゆうなを当てる。餅の顔を想い、白は笑っているように仕上げるという。深さ二十cmほどの白の丸みは母胎を思わせる。ときに凍り餅も作る。懐かしい餅搗きの音が聞こえる。

宮坂 静生

選評 I (上位作品から)

稲畑廣太郎・鈴木章和・星野高士

鈴木 今日ここは、「ホトトギス」の発行所です。

稲畑 東京で発行しているホトトギス、明治31年10月に発行したんですが、当時の場所に結構近いんですね。ここは神田の駿河台という所です。発行所は、もうちょっと行った、神保町の近くだったと思います。編集室には「ホトトギス」創刊号から全部揃っております。

星野 これは素晴らしい。今年の選句は、状況がね、今までにないこの逆境。みんな未経験のこういう時代のただ中で、それを言うのか言わないのか、これがやっぱり難しい選択だったと思います。稲畑 でもみなさん、作品に集中してできたといえるかもしれません。投句する方も選者の方も、それだけ集中力が高まったんじゃないかなとも思っていますね。

鈴木 確かに、時代ということもあると思いますけれど、重たい作品をとりにくいっていうのかな、だからといって、明るい楽しい句ばかりを選ぶわけにもいけません。いつになく緊張した選句をさせていただきました。

稲畑 私の自由題の第一席は、「夕星ゆふせいに語りかけたる虫の声」宮脇睦子さん。これは秋の虫。蟋蟀とか、鉦叩、そういった虫の声が聞こえている秋の夜です。夕星というのは、宵の明星、というか金星、一番星ですね。

鈴木 夕星と虫の取り合わせが、距離感、秋の澄み渡る大気が睦み合った、雄大な句ですよ。

星野 自由題一席「噴煙の真中辺りや春の月」。鹿児島県の尾辻さんの句でしたね。選考時の作者名は伏せてますから、あとで鹿児島だっということがわかったわけですが、この噴煙というのは、ぼ

くたちが見る、例えば浅間山の噴煙とか、阿蘇の煙とかいいですけど、それは旅先での噴煙なんで、この句は作者の生活の中の噴煙なんですネ…今ね、ちょうどその方のコメントが来ました。これすごいですよ。「今日も噴煙を吹き上げています」って、毎日なんだね。ぼくはこれ、全然知らないで、噴煙の真ん中に春の月があるっていう、明るさがないと思えました。これは春の月の、あの朧がかつた月なんですネ。朧がかつて霞んだ月が噴煙の中にはっと出た。それが真ん中辺りだったことをこの作者は発見した。その時、春の月がほのぼのと見えてきて、なんか未来が感じられるなあという思いがして、いい句だなと、特選にしました。

鈴木 「夏服の眩しきままに遠ざかる」これは兵庫県、奥村芳弘さんの句なんですけれども、この「夏服」を着た人はいったい誰なのかな、というのがまず一番疑問に思ったところなんですよネ。次に夏服で、白いシャツとか白いワンピースとか、そういうイメージが浮かんできました。これはきつと若い女性が、目の前を通り過ぎていったんじゃ

ないかな、と思ったんですよ。それを見て作者は、ふっと自分の若い頃、青春時代の思い出とシンクロしたというか、そういう甘く懐かしい瞬間を書いたんじゃないかな。
星野 この作品、じつはぼくも気になってました。稲畑 過去に遠ざかって行った、というふうにもとれますもんね。

鈴木 作者の奥村さんからのコメントです。「日差し眩しい真夏の昼下がりの明石海峡の近くで、屋外の風もなくきらめいている長い渡り廊下を、白いワンピースの女性が歩いてきた。真っ白い服が、光の塊のように眩しいままで、ゆらめきながら遠ざかっていく様子が、どことなく幻想的な世界と重なるように感じられて、このような句となった」とあります。

鈴木 その女性の眩しさだけじゃなくて、それが自分の若いときの眩しさと二重写しになっている



んじゃないかな。若さと、何もかもが眩しく感じられるようなあの夏。そういう時代への懐旧をこの句から感じましたね。

稲畑 「**鉦叩闇に段差の生まれけり**」。鉦叩、自由題の一句目も虫だったけれど、これも虫ですね。最近では都心でも鉦叩をよく聞くんですよ。ここ数年は。蟋蟀が鳴いてそれがふっと鳴き止むと、その奥からね、ちんちんちんちんと……「闇に段差の生まれけり」がおもしろいですね。

星野 うん、おもしろい。これもすごい気になった。稲畑 鉦叩っていうのは他の虫が鳴いているとほぼ聞こえないんですね。何かこう、鉦叩が聞こえる闇の静けさというのもありますし、この闇という、本当に真っ暗なんだけれども、その暗さにも段階があるという発見、闇夜の種類までも言い当てたところがいい、この鉦叩の音色が生きてくる。そういう感じがあつてですね、

星野 鉦叩と闇とは俳句ではつきすぎの世界じゃないですか。でもそこに段差が生まれたという感受性、そこまで徹底して詠んだっていうところが

いいと思うな。

鈴木 私は、何匹かの鉦叩が、前のほうの鉦叩と後ろの鉦叩が、夜の闇の深さや濃さの密度を違えている、そんなふうに読めるかなと。

稲畑 作者から「月の光の粒が寄り集まって暗闇へ落ちていくことのしずか、闇の空間に立ち現れる「いさみ」「はやり」「とまどい」「ためらい」間合の一瞬一瞬にも音の強弱があり、そこに濃淡の段差が生まれた。晩秋の月夜の散歩道」と、句の背景が届いています。ここから句が生まれたというのは、やはり言葉の妙だな。

星野 宇多先生が特選にとった題詠の句で「放生会水に抗心魚もいて」。これ、ぼくすごくいい句だなと思って、これは稲畑先生もとっている。「放生会」って、命の供養をするんですけれども、その中に、一匹の魚が水に抗っているという、そういうね、これも生きるという、その感じがよく出ていて、先生の選評に、反骨精神なのかとかつて書



いてある。そういう「魚」も、人間世界にちよつとこれ、置き変えられるんじゃないか、そんな気がして。

稲畑 「水に魚が抗う」っていうのは簡単には思いつかない。実際こういう光景をご覧になっていらつしやるわけで、だから供養をしている魚に対しての人間の気持ち、そういうものがほの見えるんですね。

鈴木 一句全体のどこかに人間が、自分の命っていうのが映り込んでいる。

稲畑 また、宮坂先生の特選で、「東京の一隅灯す夜学生」。私これは「東京」という地名が効いているんじゃないかと思うんですね。大都会の中の本当にひとすみ、一隅それを思わせませす。そこにぼつんと灯された教室。みんな今年はね、自粛してましたけど、いつもだったら飲みに行ったり。

星野 大東京の中でも一隅っていうのは、いっぱいあるんだろうけど、うまく詠われた句だと思う。たしかに「東京」が効いているわ。いい句ですね。

鈴木 次に「木々の影深く沈めて冬の水」、宇多先生、片山先生、佳作に権さんとがとっておられます。

稲畑 影を沈めるといふね、この表現がいいなと思いましたね。澄んだ静けさがあります。

鈴木 中村草田男の有名な句があるじゃないですか。

星野 「冬の水一枝の影も欺かず」これがぼくは出てきてね。

鈴木 ダブルミーニングっていうのかな、同じような世界観を詠んで響き合っているところがおもしろい。

星野 これは、「深く沈めて」っていうこの措辞、この見方がいいんですね。冬の水の寒々とした感じが出てきて。いい句だと思いますよ。

鈴木 作者、川副康孝さん、「当方89才の男子。3年前より介護の身となり、家の中にこもりがちで、作品は2年前の初冬、調布市深大寺に、長男の車で出かけて、寺院の前

の茶屋のそばの池などの自然に接して、一年後に自然に目に浮かんで来た、心に刻まれた光景を句といたしましたし



た」とありますね。

星野 調布の、武蔵野のはけの水はいい水なんですよ、あの辺は。その水の感じが、よく出ている。

鈴木 深大寺の蕎麦を思い出しますね。こうしていろんな俳句を読んで、体に取り入れ、中村草田男の句なんかも、たくさん読んでいるって言うのは大事ですね。いろんな作品のスパイスを体の中に取り込んでおく大切さ。

星野 土台がぶれないで、しっかりと地に足を付けている、この方の句。そんな気がしたなあ。

鈴木 コントラストがしっかりとっていますよね。水と木の影とがくつきりはつきりとして。

星野 対馬さん、宮坂先生特選のこの句、「**銀漢や未来は生まぬ砂時計**」これはいいと思いましたよ。

「銀漢」、天の川が横たわって見えているわけですが、砂時計が目の前において、砂がさらさら落ちていくんだけど、落ち切っちゃうんですね。未来は生まないという、実感というかな、砂時計の実体感と、それから「銀漢」という、天の川の横たわっている姿、それと砂時計の時の流れ、こ

れ悠久の時の流れをうまく使った句だと思ってるね。
鈴木 時という、見えないものの奥行きがありますね。

星野 この方のコメントです。「ある日、ぼやっと砂時計で遊んでいたら、あれ、砂が落ちていっているのは、今。下に落ちた砂は過去、それじゃあ未来はどこ、なんて変なこと考えました。掛け時計や腕時計は今しかない。」こう、書いてある。銀漢と現在、未来との、取り合わせがうまくいっているんですね。

稲畑 発想が未来的なんです。まだまだ、過去を見ていらっしやらない、未来を見てる。だから、砂時計が落ちきってしまったら、それじゃあ未来はっていうふうな問いになるわけです。

星野 落ちきって終わりでなく、そこから先を見てるということなんだね。

（「ホトトギス」社にて）



選評Ⅱ

〈上位作品から〉 井上康明・片山由美子

片山 今年は色々なところで新型コロナウイルスの関連の句が見られましたけれども、やはり作品として見ると選びにくいのですよね。俳句の長い歴史の中で本当に色々なことがあったと思います。それを乗り越えてこの形式が残ってきたことを思うと、今回選んだ作品も普遍的な句だと思います。

井上 コロナ生活において、気持ち沈んでしまふといった直接的な影響を読まれた作品も確かにありました。しかしそれとはまた別の生活の中のささやかな発見を細やかに詠んでおられる作品に、感銘を深くしました。それは、俳句という文芸の魅力を確認に感じたということなんです。現代を生きている人の今、それを確かに詠んでおられるということを実感しました。

片山 俳句は、何十年も生きてきた人の人生が反映されるわけですね。目の前の木を見ているにしてもその背景がずっとあるわけですから。自分の引き出しからどれだけのいろいろなものを引き出せるかという、過去の蓄積の勝負みたいな気もしました。

【題詠について】

片山 私は題詠は季語より一字が好きです。その人の持っている想像力だとか色々なものが出てくるので、それをどう生かすかということだと思います。

井上 さまざまな暮らしの一場面を詠んでいました。生きたいという電話や、拭き上げる生家、生ビールなど。生きるという字を上手に俳句の中に溶かし込んで、より深い奥行きのある世界を詠んでい

ます。

片山 題詠の面白さで、たまたまその字が出てきたから生まれたという句に結構いいものがあります。もしその題がなかったら、この句は作らなかったのではと。それが題詠の醍醐味、面白さだと思います。

井上 題の言葉から連想して、実感に結び付けていくことが大切です。

片山 作る側は題を頭において考えるわけですが、選ぶ方はその句が良いかどうか題にこだわらずに選ぶことになりますよね。

井上 作品としていいものを選ぶということですので、題の字が浮き上がるような作品では生きていないことになるでしょう。



井上康明 題詠特選

拭き上げて雪の匂ひの生家かな 東京 冬 魚

井上 權先生も採られていますね。北海道余市町出身の權先生は雪国の生活を具体的によくご存知の方です。私は身近に秋田出身の方がいらして、その人は雪の降る季節になると実家に帰って雪のための準備をするというのです。離れたところに暮らしている人が、生家に帰り、雪の準備をしている風景を想像しました。

片山 この句、実は気になったのですが、「拭き上げて」と「生家」がちょっと読みきれなくて通過してしまっただけです。今、選評を聞いて、そうだったのかと思いました。

井上 雪が来るので家の外の準備もするのでしょ
うが、家の床、大黒柱などを綺麗にしている。家
の中のしんとした静けさと、外からは、やがてそ
の雪に埋まるであろう—もしかするともうちらち
ら降り始めるのかもしれない雪の匂いが伝わっ
てくるのでしょう。

家の中の静寂と、雪が降り積もるであろう山や

野原の深さ広さを想像させるいい句だと思えます。故郷の生家に対する思いのこもった作品ではないでしょうか。

片山由美子 題詠特選

会へばすぐ山の話や生ビール 埼玉 小林通子

片山 これは雰囲気明るく楽しそうです。山男のグループ、夏になると生ビールのジョッキを傾けて：とそんな雰囲気を思いましたが、今年はなかなかそういう風が集まって乾杯とはいかないかもしれません。過去にはきつとこういうことがたくさんあったのでしよう。各々の自慢話がふくらんで「生ビール」が効いていて。

井上 「会へばすぐ」からは親しさが伝わってきま

す。

片山 他のことには関心がないのではないかしら。

井上康明 自由題特選一席

露草や嬰百日の指ぢから 大阪 浅井映子

井上 露草は、秋の初めの瑠璃色の可憐な花。生まれて百日経った赤ちゃんの手の辺りを触ったらきゅっと握られたという情景。健やかな成長が感

じられたということでしょう。いたいけな命を初秋の季節の中に感じ取ったのです。

片山 「露草」がいいですね。木の花や大きな花だと赤ちゃんの感じが出ませんよね。かわいい花が咲きますでしょう、瞳のようにキラキラしているそういう花なので、それが赤ちゃんの生命力と合ったのではないのでしょうか。

片山由美子 自由題特選一席

遠足が来てライオンの立ちあがる 神奈川 竹村清繁

片山 「遠足が来て」は俳句らしい表現。もちろん遠足の子どもたちが来たということなのですが。ライオンがそれまで寝そべっていたのが、ちょっと見せてやろうかとおもむろに立ち上がった様子がすごく面白いと思いました。子どもたちが歓声を上げて喜んでいそうな、空間の広がりがいいと思いました。

井上 春ですね。背景に春のあたたかさがあって、味わいになっていると思います。

稲畑廣太郎 題詠特選

鉦叩闇に段差の生まれけり 神奈川 原田 博之

井上 この句に大変惹かれました。鉦叩は、夏の終わりから秋に入る頃にチンチンと鳴く生活に近い虫です。その鳴き声で闇に段差が生まれたという、ここに大きな飛躍があります。一瞬の闇の濃淡なのですが、同時に秋が深まり闇も深くなつていく時間の経過を思わせます。

思いきった表現で、ごつごつしています。秋という季節の鋭さが感じられる印象を持ちました。

星野高士 自由題特選一席

噴煙の真中辺りや春の月 鹿児島 尾辻敬弘

片山 ちょっと意外な感じを受けました。普通春の月は滴るような、とか瑞々しさといった感覚を詠みます。「噴煙の真中」というので作者は鹿児島あたりの方かと思つたのですが、やはりそうでした。井上 荒々しい感じの噴煙の中に春の月がぼうつと浮かんで見える、対比の面白さを思います。

片山 見え隠れしているんですね。構図というか、空間の切り取り方がとても面白いと思いました。

井上 鹿児島の人だからこそ捉えた春の月なのでしよう。

【俳句の生まれるきっかけ】

井上 俳句は、見たこと聞いたこと体験したことが元になっていくと考えています。題や一字で詠む時も、その言葉や文字から連想される様々な自分にとって親しい言葉や場面、自分が今まで体験してきた人生の一場面に返っていくと良いでしょう。例えば今回の題の「生」で先生という言葉で連想するならば、どんな先生とか、自分にとって先生という人との関係はどんなものだったんだろうか、子供の頃のどんな先生の姿を思い出すかというところから入る作り方です。

片山 先生との出会いで俳句を作るとします。それぞれ好きだった先生のことを思い浮かべたり、何年生の時に何があったという「場面」を思い出したりしますね。それが蘇ってくるという一旬になる気がします。

夏井いつき 題詠特選

ダリア、ダリア先生の名字が変わる 東京 嫉妬林檎

井上 思いきった破調の句を採られています。これは先生の名字が変わる、結婚されるということです。ダリアに、少年が語り掛けているわけです。自分の憧れの先生が結婚する、そこでちょっと、この少年は傷ついている、そんな場面を作っているのです。

片山 夏休みが終わって二学期に学校へ行ったら先生の名字が変わって

いたという：

井上 少年は少なからず傷ついたのでしよう。

片山 この一字の題

「生」にしても季語が題である時にしても、俳句特有の出し方です。短歌だと題をイメージで出しますね、



「後悔」とか「別れ」とか。それによってある場面やその人の経験を一つの形にする。

俳句は最初に概念があるのではなくて、やっぱり物や言葉、そこから出発しますけれど。

井上 ええ。「後悔」という概念から俳句を作るとなると、句になるまでにずいぶん時間がかかる、遠いという気がします。

片山 そうでしょう。

井上 後悔した日の空の色は何だったか。

片山 どんな花が咲いていたか。

俳句はまず「物」なのです。概念的なものを表現するにも、物から出発する。短歌と比較すると、ちよつと面白いかなと思います。

井上 短歌と俳句の特徴が浮かび上がってくるような気がしますね。

(二〇二〇年十二月十四日、NHK学園にて)

龍太賞「みづの旅」

埼玉 鈴木 恭子

みづ 涉り 来たる 人 ぞ 忽 明 の 春

大寒や 硯に 海といふ 窪み

水底の やうな 暁 龍太の 忌

一鳥も 啼かぬ 森 抜け 雪 解 水

木の 根 開く 水は 水音 惜しまず に

水 温む 産後の 馬の 毛 艶よき

ひたひたと 水の 感触 さくら 樹下

上 簇や 灯が 灯を 誘ふ 宵の 雨

青 あらし 浮標フネイの 齒 ざしり きりも なや

水 遊して 水の 香の 風 もらふ

星 涼し 水も 旅する もの として

草 雲雀 どの 水と なく 韻き けり

下り 築 流れに 空が 降りて きて

水鳥の こゑ 一亭に 一客に

みやこどり 翔つや 隅田川すみだを 光らせて

選者近詠作品とメッセーシ

(敬称略 五十音順)

稲畑 汀子

いつ果つる命と思ふ去年今年
上京もままならぬ世や年迎ふ

宇多喜代子

足弱にえのころ草が絡みつく
青葱の先のするどき夜明け前

大串 章

冬めくと言ひ印旛沼見渡せり
落葉道万葉歌碑に立ち止まる

高野 ムツオ

大津波生れし方より初日影
大震災十年後へと雪吹き込む

敬愛する小説家の中上健次から「俳句はすごい、この一句を自分が書くとなると原稿用紙百枚かな。それを一行でつくりあげている」と言われたことがありました。内なる矜持が弾けて外に向かつて歩き出したような気がして、俳句を知らない多くの人の中にこの歩を進めてゆくことの意義の大事を自覚したことでした。俳句には、それを文学として解析思考し遂行するに足る内実もあれば、日記のように日々の出来事や気持ちの短い一行に残してゆく魅力もあります。そのいずれれもが俳句のもつ大きな柱なのです。

宇多喜代子

15句をそろえることは大変難しいことです。一句一句の完成度も大切ですが作者の俳句に対する姿勢や作者自身の顔、生活が見えてくるのが大切です。たくさん作り、そのなかから選んで何度も何度も推敲を重ねることも楽しいことです。並び方をいろいろ工夫し、「自分の俳句の姿はこれだ」と納得するまで続けることです。賞に入ることを目指すよりも、自分の納得する15句を作る気持ちの方がなによりも大切です。苦勞し成し得た15句は作者のかけがえのない心の財産なるでしょう。皆さんの応募を待っています。

高野 ムツオ

龍太賞の選にあたって

高野ムツオ

今回、はじめて龍太賞の選考にあたりました。一句一句と向きあう自由題・題詠とは違って、15句作品全体で判断することが難しかったです。はじめには魅力的な作品が並んでいるのに、後半のほうは首をかしげるような物足りない作品があったり、なんだか物足りないと思って読んでいたら途中でぴかりと光る良い作品があり全体が印象的に感じられたりしたこともあります。

一方で全体としてまとまっているがどこか類想感を覚える作品があり作者が見えてこないもの、反対に個性的で独自の表現への意欲が感じられるもののその意欲がやや空回りしてしまったな……と惜しく感じられるものもあり、15句の難しさを痛感しました。

しかし皆さんの作品から応募者としての熱意や

俳句に対する意欲がよく伝わりたくさんの刺激を受け選にあたることができました。楽しみながら悩みながら選にあられたことを嬉しく思っております。

今回の受賞作「みづの旅」は、全選者一致で選ばれました。作者は鈴木恭子さん。選者は、コロナ禍のため直接は顔をあわせられませんでした。オンラインでの会議を行い、皆さんと活発な意見を交わすことができました。

「みづの旅」は、15句全体が「水」をテーマにしています。水は、人間が生きていくうえでどうしても欠かせないもの。全ての生き物に欠かせないものです。水のありかたが春夏秋冬、様々な場面で詠まれています。川、湖、海、雨もあります。作者の姿勢が一貫して安定した力量が感じられました。



中では

一鳥も啼かぬ森抜け雪解水

これが印象的でした。春遅い山中の様子が感じられます。

木の根開く水は水音惜しまずに

こちらは大変魅力的でした。木の根開くという季語が効果的で、その土地に生きている思い、風土性が色濃く感じられ、春が来た喜びがあふれていました。

星涼し水も旅するものとして

今回のテーマがひとつにまとまっているスケールの大きな俳句です。15句は平明な言葉遣いでありながら豊かな情感がたたえられていて受賞作に相応しいと感じました。鈴木さん、おめでとうございませう。

今年はこちらようど飯田龍太生誕100年にあたる年でした。龍太は私の師である金子兜太、佐藤鬼房と並んでわたしが青春時代にたくさん影響を受けた人です。この三人に共通しているのは自分の住む風土へのこだわりが徹底していることです。

自分の生き方への信念がゆるぎない、俳句の信念を貫き通す精神性は多くのことを教えてくれます。

三人のなかでもっとも抒情が豊かなのは龍太でしょう。自然を信じ自然に自分を委ね、自然のなかで自然と一体化する姿勢を貫いている、そこからあふれる豊かさ、厳しい風土とともに俳句がある。それが龍太俳句の魅力でしょう。

一月の川一月の谷の中

有名な作品ですね。一瞬のうちにまとまったそのうです。しかしながら、この句の背景には三六五日の川や谷や甲府盆地の様々な生活、一日一日を背後にしながら、その象徴としてへ一月の川一月の谷の中という姿があるのでしょうか。

広くて深い世界です。わたしもこのような俳句を目指して頑張りたいと思っっています。

(二〇二〇年十二月二十五日、遠隔会議システムにてお話を伺いました)



第22回 NHK全国俳句大会「特選作者の横顔と選者からのメッセージ」

令和3年1月24日発行

編集・発行 NHK全国俳句大会事務局 ©2021 NHK・NHK学園